

少年メッセージ 2023 岩出市審査会
入賞

鳥とじいちゃん

岩出中学校 2年 高林 心海

桜が満開に咲いた日、私のじいちゃんが亡くなった。とても暖かくて晴れた日だった。

私のじいちゃんは、私の母の父親で、歳のわりに若く見えて、カッコいい人だった。いつも、サングラスをかけて、シャツを着て、バイクに乗って、たくさんのお菓子を袋いっぱいにつめて、私に会いに来てくれていた。でも、袋いっぱいのお菓子の中には、私の好みのお菓子は少なかった。じいちゃんは、少し変なお菓子ばかり、買ってくるのだ。子供ながら、気をつけて一度も「このお菓子は嫌だ」とは言わなかった。そんなじいちゃんが春休みに亡くなった。桜がすごくきれいに咲いていたのに。

じいちゃんは、動物が大好きで「チャオ」という名前のポメラニアンを飼っていた。チャオは、私が生まれる前からいたので、私にはちょっと先輩づらをする時もあった。じいちゃんとチャオは、毎日5キロメートルくらい散歩に行っていた。じいちゃんが、八十歳になった頃、チャオは、天国へ行ってしまった。私はチャオが好きだったけれど少し太っていたので抱っこしたことが無かった。亡くなった日、初めて抱っこしてみた。重たくて、フサフサな毛がとても温かく感じた。それから、じいちゃんは、心不全をおこして、母は、介護の日々が続いた。

5年が過ぎ、中学に入って初めての春休みがやってきた。友達と色々計画を立てて楽しい春休みを過ごしていたが、ある日、母がバタバタとして「じいちゃん…あかんかも」と言って、家を出ていった。八十五歳だった。

翌朝、父と母は、お通夜の用意で忙しいのでやることのない私は、友達と遊んでいた。自転車に乗っていたら、歩道に一羽のハクセキレイがいた。なんだか様子がおかしいと思い、私と友達は、自転車を止めて、ハクセキレイに近づいた。私は、じいちゃんに似ていて動物をこわがったりはしないため、そーっと手をのばし、ハクセキレイをさわった。すると「ちょこん」と私の手の中に入ってきてギュ

ー」と思った。なぜだか、不思議とうれしかった。しばらく動かずにそのままいたけれど、肩にも乗るかなと思い、乗せようとした瞬間、ハクセキレイは、飛んでいってしまった。

ふと、私は小さい頃、じいちゃんが、私の手を握るとき「ギューツ」と少し強く握るのを思い出したのだ。そして、その夜に父と母に、昼に出会ったハクセキレイの話をした。母は、すぐに笑顔になって「それ、じいちゃんやで」と言った。なんだか、幸せで、笑顔になったようだった。だって、今まではハクセキレイが、手に止まることなんて、キセキのようなことだから。

じいちゃんにとって、私はたった一人の孫で他にはいない。だから、これくらい特別扱いを受けても良いだろうと私は少し自慢げになった。こんな話を他の人にしても、信じない人が多いだろうけれど、私にとって忘れない春休みの一日の話になったのだ。そして今じいちゃんの仏壇には、毎日「ポン菓子」が供えられている。これは、母が「じいちゃんが好きなお菓子だから」と言っていた。じいちゃんが持ってきてくれたたくさんのお菓子の中に、にんじんの形をした袋に入ったポン菓子が、よく入っていたのだ。あれは、じいちゃんが一緒に食べようと買ってきたのかもしれない。今では、私の大好きなお菓子の一つだ。